

為替週間展望 = ドル円は底堅く、もみ合いながら上値を追う展開か

[8月12日からの1週間の展望]

週間高低 (カッコ内は日)		8月5日～8月9日			
	始値	高値	安値	終値	前週比
ドル・円	146.65	147.90(7)	141.70(5)	147.12	+0.59
ユーロ・ドル	1.0909	1.1008(5)	1.0882(8)	1.0926	+0.0015

国内株・金利/米国株・金利		終値		前週末比	
		終値	前週末比	終値	前週末比
日経平均株価	35,025.00	-884.70	日本10年債利回り	0.861	-0.089
ダウ平均株価	39,446.49	-290.77	米10年債利回り	3.988	+0.197

<来週の主要経済統計等>

- 12日 独6月経常収支
- 13日 英7月雇用統計
 - 独8月ZEW景況感指数
 - 米7月生産者物価指数
- 14日 NZ準備銀行(RBNZ)政策金利
 - 英7月消費者物価指数、英7月生産者物価指数、英7月小売物価指数
 - ユーロ圏第2四半期GDP改定値、ユーロ圏6月鉱工業生産指数
 - 米7月消費者物価指数
- 15日 日本第2四半期GDP1次速報
 - 豪7月雇用統計
 - 中国7月鉱工業生産指数、中国7月小売売上高
 - 日本6月鉱工業生産指数確報値
 - 英第2四半期GDP速報値、英6月貿易収支
 - 英6月鉱工業生産指数、英6月製造業生産指数
 - スイス7月生産者・輸入価格
 - カナダ6月卸売上高
 - 米7月小売売上高、米8月NY連銀製造業景気指数
 - 米新規失業保険申請件数、米8月フィラデルフィア連銀景況指数
 - 米7月輸入価格指数
 - 米7月鉱工業生産・設備稼働率
 - 米6月対米証券投資
- 16日 NZ第2四半期生産者物価指数
 - 英7月小売売上高
 - ユーロ圏6月貿易収支
 - 米7月住宅着工・許可件数
 - カナダ6月製造業出荷
 - 米8月ミシガン大学消費者信頼感指数速報値

【前回のレビュー】ドル円は7月11日の高値161.70台から8月1日の安値148.50近辺まで13円以上の下落を見せた。下げが続いてきたことで、反動高の動きになりやすい地合いとなっている。一方で、戻したところでは売り圧力に押されやすいとみられ、しばらくは150円を挟んでの振幅が続くことになるとした。

【ドル円はパニック的な下げから戻りを見せる】

2日の米雇用統計の結果が悪く、その後一段とドル安円高が進んだ。米国の景気減速への警戒感から米長期金利が低下するとともにドル売りにつながった。この日は日経平均が2000円超の急落を見せており、NYダウが610ドル安、ナスダックは2.

43%安と大きく値を崩した。

週明けの5日に日経平均は前日比4451円安となり、過去最大の下げ幅となった。2日の米雇用統計の弱さを受けて売りが広がった。リスク回避の円買いも加速して、ドル円は141.70近辺まで急落した。円キャリートレードの円売りポジションの巻き戻しもかなり出たとみられている。なお、アジアの株式市場も全面安となり、5日のNY市場ではNYダウは1033ドルの急落を見せるなど世界的な株安の動きが続いた。

米雇用統計の悪化の影響で、米連邦準備制度理事会（FRB）は年内0.75%の利下げ予想から、1.25%の利下げを見込む見方も出てきた。一部ではFRBが緊急利下げに動くといった見方も出ていた。ただ、これはパニック的な動きに対する過剰反応とみられる。

7月の米雇用統計で非農業部門雇用者数は11.4万人増となり、事前予想17.5万人増を下回った。また、前回値は20.6万人増から17.9万人増に下方修正された。確かに雇用者数は予想を下回ったものの、減少に転じたわけではない。失業率が4.3%となり、直近3か月の平均が過去12か月の最低値から0.5上回ると景気後退入りするというサム・ルールに該当したことも、市場心理を悪化させた。なお、この4.3%という水準は歴史的にみると極めて低く、それほど悲観するような結果ではない。

なお、5日のNY市場では、7月の米ISM非製造業景況指数は市場予想を上回ったこともあり、過度なドル売り円買いが一服して、141.70近辺から146.60台まで一時回復した。その後は伸び悩み144円台前半で引けた。

6日には日経平均が前日の暴落の反動もあり、3217円高となり、過去最大の上げ幅を記録した。こうしたこともあり、ドル円は146円台まで再び上昇した。7日には日銀の内田副総裁は講演して、「金融市場が不安定な状況で利上げをすることはないと述べた。また、「日本は一定のペースで利上げしないと、金融政策が後手に回るような状況ではない」「当面、現在の水準で金融緩和をしっかりと続けていく必要がある」とも述べた。この動きを受けて、円売りの動きからドル円が急伸した。ドル円は147.90近辺まで上値を伸ばした。その後は一進一退の動きながらも145～147円台で推移している。

8月12日の週の米経済指標では14日の7月の米消費者物価指数が注目される。事前予想では前月比は総合が+0.2（前回-0.1%）、コアが+0.2%（前回+0.1%）といずれも前回を上回る見通し。一方で前年比は総合が+2.9%（前回+3.0%）、コアは+3.2%（前回+3.3%）といずれも前回から減速する見通し。

それ以外には13日の米7月生産者物価指数、15日の米7月小売売上高、米新規失業保険申請件数などが注目される。良好な結果ならドル買いに、逆ならドル売りに傾きそうだ。市場予想と比べて上振れする米経済指標が多ければ、米国の堅調な景気が確認されて、ドルは底堅い動きを見せそうだ。

米国の景気減速懸念を受けて、ドル円、日経平均、米国株は急落したものの、パニック的な売りが落ち着くと戻り歩調で推移している。米経済指標の動向次第ながら、ドル円は底堅く、もみ合いながら上値を追う展開が見込まれる。ドル円の目先の予想レンジは、144.00～152.00円。

日米の経済指標やイベントとしては、13日に米7月生産者物価指数、14日に米7月消費者物価指数、15日に日本第2四半期GDP1次速報、日本6月鉱工業生産指数確報値、米7月小売売上高、米8月NY連銀製造業景気指数、米新規失業保険申請件数、米8月フィラデルフィア連銀景況指数、米7月輸入価格指数、米7月鉱工業生産・設備稼働率、米6月対米証券投資、16日に米7月住宅着工・許可件数、米8月シガン大学消費者信頼感指数速報値などがある。

【ユーロドルはレンジ相場で推移か】

弱い米雇用統計を受けてユーロ買いドル売りの動きからユーロドルは1.0780近

辺から1.0920台まで急伸した。5日には米景気減速懸念などを背景にドル売りの動きとなって、ユーロドルは1.1008近辺まで上値を伸ばした。

ユーロドルの1.1000ドル乗せは長く続かず、伸び悩みを見せている。一段と大きく上値を伸ばしにくいものの、大きな崩れも見せていない。こうした中、ユーロドルはレンジ内で一進一退の動きが見込まれる。ユーロドルの目先の予想レンジは、1.0800～1.1050ドル。

8月1日の英金融政策委員会(MPC)で英中銀は0.25%の利下げを決定した後、ポンドドルは一時的に戻す場面も見られたものの、軟調な流れを継続してきた。7月17日の高値1.3044から8月8日の安値1.2665まで370ポイントもの下げとなっている。下向きで推移する5日移動平均線を上抜いてきており、目先は戻り歩調で推移するとみられる。ポンドドルの目先の予想レンジは、1.2600～1.2900ドル。

日米以外の今後の経済指標やイベントは、12日に独6月経常収支、13日に英7月雇用統計、独8月ZEW景況感指数、14日にNZ準備銀行(RBNZ)政策金利、英7月消費者物価指数、英7月生産者物価指数、ユーロ圏第2四半期GDP改定値、ユーロ圏6月鉱工業生産指数、15日に豪7月雇用統計、中国7月鉱工業生産指数、中国7月小売売上高、英第2四半期GDP速報値、英6月貿易収支、英6月鉱工業生産指数、英6月製造業生産指数、スイス7月生産者輸入価格、カナダ6月卸売上高、16日にNZ第2四半期生産者物価指数、英7月小売売上高、ユーロ圏6月貿易収支、カナダ6月製造業出荷などがある。

MINKABU PRESS 佐藤昌彦

※投資や売買についての判断は自己責任でお願いします。

<免責事項>

本レポートは情報の提供のみを目的としています。投資に関する最終判断はご自身の責任においておこなわれるようお願いいたします。また本レポートに掲載している情報の正確性については万全を期しておりますが、人為的、機械的その他何らかの理由により誤りがある可能性があり、株式会社ミンカブソリューションサービスは、利用者がこれらの情報を用いて行う判断の一切について責任を負うものではありません。また、株式会社ミンカブソリューションサービスが提供するすべての情報について、許可なく転用・転載等することを固く禁じます。

<著作権について>

本レポートの著作権は、原則として当社(株式会社ミンカブソリューションサービス)が保有しており、著作権法、その他の法律および条約により保護されています。本レポートご利用のお客様は、私的使用目的の複製、引用等著作権法上認められている範囲を除き、当社およびその他著作権者の許諾なく、これらの著作物を翻案、公衆送信、営利を目的とする使用等いかなる目的、態様においても利用することはできません。